

50年の歴史と技術を土台に “今”を映した経営で新時代を築く



鉄、アルミ、ステンレス等の金属加工、
精密板金、溶接、組立まで

株式会社 丸和製作所

東京都昭島市美堀町 4-8-2
TEL 042-541-4577 FAX 042-545-2262
URL: <http://maruwa-ss.net>

代表取締役社長 中野 健太郎

【中野社長の足跡】
大学卒業後、数ある選択肢の中からあえて「冒険を」と家業を継ぐ道を選ぶ。他社で経験を積んだ後に「丸和製作所」に入社し、先代の薫陶を受けて現職に就任。技術者肌であった創業者の祖父とは異なり、独創的な発想を持つ経営者だ。



「どんなに難解な依頼でも必ず形にしてみせます」

■鉄からアルミ、ステンレスまで金属加工なら何でもござれの『丸和製作所』は、平成22年で創業50年を迎える。三代目の中野社長は、代々伝わる技術力を武器としながらも新しい経営方針で時代を切り拓いている経営者だ。そんな熱意溢れる社長にインタビュー。

大沢 御社をご創業からどれぐらいの歴史をお持ちなのでしょう。
中野 当社は私の祖父が昭和35年に創業しましたので、もうすぐ50周年を迎えます。祖父は戦時中に飛行機の整備をしていたようで、その技術を活かして金属加工や精密板金を始めたのですよ。戦後の産業復興に必要な不可欠な

技術として需要も多く、羽振りが良くてもおかしくはなかったのですが、本人はずっと高級車ではなく軽自動車に乗っていましたね。
大沢 そんなお祖父様の姿をご覧になって、社長も同じ道に進もうと？
中野 そうですね。祖父の影響は大きかったように思います。ただ、私がものづくりの道に進もうと決めたのは、「冒険を試みよう」と思ったからなの

です。実は大学卒業時には銀行から内定を戴いており、家業を継ぐかどうか迷いに迷いました。祖父と先代が基盤を築き上げていたとは言え、名もない中小企業よりも銀行勤めの方が安泰でしょう。しかし私はあえて自分の力で当社を動かしていこうと、後継することにしたのです。それで他所で数年経験を積んだ後に当社に入りました。
大沢 社長が入社された当時は、お祖父様が現役でいらっしゃったのですか。
中野 もう引退していましたね。けれども当時の従業員の方々は祖父の姿を見かける度に背筋をピンと伸ばしていましたから、相当大きな存在だったのだと思います。また、先代も祖父から薫陶を受けたと聞いていますし、私自身も経営者としてあるべき姿を教えてもらいました。

大沢 それはどういったことでしょうか。
中野 従業員を幸せにするように——それが祖父の教えです。投げやり仕事を振るのではなく、きちんとフォローしながら責任を持たせるようにといった、情の部分の大切にするよう教えられました。その上で、私なりの経営を行っていこうと努力しています。
大沢 社長なりの経営はどういった部分から実践されてきたのですか。
中野 まず、偏った取引先への依存体



質から脱却することでした。実は5年前の春に、当社の売上げの6割を占めていた得意先が倒産してしまい、7千万円の不渡り手形を被ったのです。それまで全く実感のなかった「連鎖倒産」という言葉が頭をよぎり、全身が凍るような思いをしたのは今でも忘れません。当時の危機はコツコツと貯めてきた蓄えで何とか持ちこたえましたが、以来、多業種多社とお付き合いをすべく取引先の新規開拓に努めてきました。

また、同業者との連携強化にも現在力を入れているところです。私は日ごろから各種勉強会などに参加して、ある銀行のセミナーにてパートナーと出会うことができました。そちらは同業者とは言え、小さな製品を専門に扱っておられて大きなものは断っておられたそう。逆に当社はサイズの大きな品を得意としていますから、互いに融通し合おうということになったのです。すると我々の取り組みが注目を集めて多方面から依頼が舞い込むようになり、両社ともに潤える好循環が生まれたのですよ。

大沢 その輪が広がれば業界の発展にもつながるでしょうし、理想的な関係ですね。今後は更なる展開もお考えと思いますが、具体的な展望をお聞かせ下さい。
中野 特殊技術や特許取得も大事ですが、私は取扱品目を拡充していきたいと考えています。どんな品でもお客様からご要望を受けたら確実に形にできる、そんな力ある企業でありたい。また祖父の意志を受け継ぎ、従業員に「丸和製作所」で働いて良かったと思ってもらえる会社であり続けることも私の使命だと思っています。このご時世で給料カットも当たり前となりつつありますが、現在、平成22年2月に催される「多摩工業交流展」に向けて従業員一丸となって自社製品の製作に力を入れています。まだ挑戦を始めたばかりですので、品物によ

ては同業者からすれば至らない部分もあるかもしれません。しかし一歩を踏み出す大切さと、「ものづくり」を行っているときの皆の「眼差し」に活路を見出しています。小さな板金屋でやれることは限られているのかもしれませんが、この一歩を足がかりに今後の展開を広げていきたいと思っています。
大沢 トップがそんな姿勢を示しているからこそ、御社は一致団結しているのでしょうかね。
中野 不況を乗り切るには社内の結束力しかないと思いますので、今後も従業員と力を合わせていきたいですね。そして時代の流れを見極めながら、堅実経営で50周年、そして次の100周年へと続く道を歩んでいきたいと思っています。
(2009年10月取材)



どんな要望も形にする技術力の背景には……

▼戦時中、飛行機の整備を行っていたという中野喜一氏が創業した『丸和製作所』。通信機や自動車部品を中心に板金やプレス溶接加工から始まり、現在は様々な金属加工・精密板金、溶接、組立まで行い、鉄・アルミ・ステンレスをはじめ金属ならなんでも手掛けられるほどの実力を誇っている。実績の一例を挙げても、誰もが目にしたことのあるパーキング用精算機から、医療機器コントローラー、自動車の走行テストで用いられるタイヤ冷却ファンまで多種多様だ。同社の技術力を裏付けているのは、何と言っても従業員らの結束力だろう。一人ひとりが各持ち場で最大限の力を発揮していることが、最高品質を実現しているのだ。取引銀行が催す運動会にも同社は全員が参加するほど普段から仲も良く、不断の努力とチームワークがものづくりを支えていることが窺える。



ゲスト

大沢 逸美

『丸和製作所』さんの創業者である中野社長のお祖父様は、現場を愛する根っからの技術者だったそう。社長は状況を冷静に分析した上で堅実な道を選択されるやり手経営者とお見受けしましたが、「業種を問わず、どんな要望でも形にしていきたい」との言葉からはお祖父様ゆずりの技術者らしさが感じられました。きっとこれからも、ものづくりの担い手として素晴らしい製品を作り続けてくれることでしょう。時世が時世だけに厳しい局面も多いかと思いますが、信念を貫き通して『丸和製作所』さんの新しい歴史を築いていって下さいね。